平成 11 年 3 月４日

【収蔵品展開催中】

東京の伝統「組紐の技と職人」

― 豊島区立郷土資料館で、3 月 31 日（水）まで ー

豊島区立郷土資料館（西池袋 2－37－4）では、『東京の伝統 組紐の技と職人』と題し、日本の伝統的な技術としての「組紐」とその技を伝える「職人」の姿を紹介している。期間は 3 月 31 日までで入場は無料。

組紐といえば帯締めや羽織紐が代表的なものだが、東京では明治後期から昭和１０年代にかけて、生産量が高まるとともに充実した製品が作られたといわれる。そのなかにあって豊島区では、糸を撚る技術の発達と関連して籠組合による多彩な羽織紐が量産された。本展は、帯締めや羽織紐にかぎらず日常生活の身近なところにある組紐について、その歴史の奥深さにふれるとともに、豊島区にゆかりのある組紐職人が遺した製造用具、そして伝えられゆく技を、地域の成り立ちのなかから紹介している。

【展示構成と主な展示資料】

１この道一筋

「手のあぶらが切れた 60 歳、70 歳を過ぎてやっといい味の紐ができる」と組紐職人の間で言われている。これは、ひとの手のあぶらは絹本来の光沢をなくすものであるということと、紐を組むという技の習得にはそれだけ時間がかかるということを意味している。ここでは、各職人さんが長い年月をかけて習得した器台と作品を紹介。そして、現在区内唯一の組紐職人の平田晃氏が、日本古来の組紐の組み方の復元を試みる足打台も展示されている。また、会場のモニターでは、平田氏が組紐を作る姿を記録した映画「東京組紐」（平成 4 年度豊島区広報課制作）のビデオ上映が行われている。

２手仕事に生きる

一本の帯締めの作られる作業手順を紹介。現在の組紐の代表としての帯締めが、いかに手をかけ時間をかけて作られているかが分かる。また、帯締めの両端は房になっているが、この房作りを専門に行っていた職人が使用した撚り機、八丁機、自製改良座繰り機などを展示。

３生活の脇役

組紐は意匠的に優れているとともに、実用的なものとして使われてきた。刀の下緒、ループタイなど、私たちの暮らしの中にみられる組紐の技を生かした製品を展示するとともに、現在につながる組紐の道具や技を描いた江戸時代の絵画資料も展示。

４技を伝える

組紐の技は、家業としての紐屋の存在によって支えられてきた。豊島区内におけるいくつかの事例から、家族による製造の様子を見る。さらに、組紐文化の遺産として「土山コレクション」（池袋に住む土山弥太郎氏が編纂し、現在東京農工大学附属繊維博物館に所蔵されている、明治時代から昭和 40 年代にかけての羽織紐の組見本で、約 1300 点ある）の一部と土山氏が所蔵するものを展示。

◇休 館 日：月曜、祝日、第 3 日曜日、3 月 23 日（火）
◇開館時間：午前 9 時～午後 4 時 30 分

なお、3 月 6 日（土）、20 日（土）午後２～３時には郷土資料館学芸員による展示説明会が行われる（予約不要）。

詳細：豊島区立郷土資料館